

QASG ニュース

82
号



品質保証研究会
Quality Assurance Study Group

2014・11

内容

- I. 第24回通常総会開催
- II. 第24回通常総会・特別講演
- III. 平成26年度定例研究会・各グループ活動計画
- IV. 平成26, 27年度役員紹介

編集後記

I. 第24回通常総会開催

第24回通常総会が平成26年6月10日(火)、学士会館にて開催され、盛況のうちに終了した。当日は、59名出席(他書面による出席32名)のもと、松本副会長の司会で進められた。

1. 通常総会議事

(1) 関村会長挨拶

東大の関村でございます。本日は、宅間顧問をはじめ会員の皆様に、通常総会にお集まりいただきまして誠にありがとうございます。この一年間を振り返りますと、私自身は日本原子力学会の「福島第一原子力発電所事故調査委員会」で調査報告書を取り纏め H26 年 3 月に、国内外に向けて発行出来たことが大きな活動の一つでありました。関連して、学協会の活動の中では日本原子力学会の倫理規程の改訂等の作業に携わり、当研究会のメンバーの多くも一緒に取り組んでいただきました。また、日本電気協会では、今年 5 月に「第 1 回日本電気協会原子力規格委員会シンポジウム」を東大で開催し、近藤駿介先生のご講演をいただくとともに班目春樹先生(当研究会前会長)の参加も得て、福島事故の反省を踏まえ次のステップに向かうためにどのように行動するかについて議論をさせていただきました。さらに、経済産業省では「自主的安全性向上 WG」に参画し、報告書の取り纏めにも協力しました。規制に基づいた安全性の確保に加え、産業界における自主的な安全性向上をどのように具体化すべきか、厳しい意見を戦わせながら進んでいくべき道について、ある程度の方向性を提示することが出来たと考えております。

これら全ての中で、我々の当研究会の活動と深く結びついているのが、リスクのマネジメント活動です。広い意味で品質保証をとらえると、多様な業務におけるリスクをいかに管理すれば良いかという議論と重なる課題があり、当研究会において様々な視点で検討が積み重ねられてきたと考えています。様々なシナリオを経て顕在化するリスクを現場レベルでどのように捉えて行くか、自主的なリスク管理活動が現場でどのように浸透して行くか、それぞれの人がこれらのリスク管理活動に心を砕いていると思っています。さらに福島事故で顕在化したリスクにどのように対処して行くかということが我々の重要な視点ではないかと思っています。本日は、柳田先生より、詳し



い分析をお聞かせいただき、我々としても一層議論を深めていきたいと考えております。リスクを顕在化させない経験の蓄積と共有化、これらのための組織文化に係る活動をどのように進めて行くかという視点を常に持ちながら地に足のついた活動を進めて行くことが必要と思っております。さらに安全確保の目的を共有しつつ、このためにリスクの全体像を如何に把握して行けるかという上位概念を我々は明確に意識して行く必要があると考えています。現場でのリスク管理活動から、さらに広くリスクの全体像の把握に基づいた具体的な改善のために、色々なレベルで品質保証の専門家がご活躍していただけたと思います。将来においても、品質保証活動を基盤とした我々のモチベーションを如何にして高く維持して行けるかという点につきましても、是非当研究会の活動の中で、今一度確認していただくということをお願いいたします。

今回の総会におきまして、継続的な活動のご報告に加え、柳田先生のご講演をしっかりと胸に刻む機会になればと期待させていただいていることを申し上げて、会長としての挨拶に代えさせていただきます。

(2) 議長選任

会則/細則に従い、関村会長が議長に選任され、(3)項議事が行なわれた。

(3) 議案審議

① 平成25年度活動報告ならびに収支決算案承認の件

小嶋幹事、岩瀬幹事より、それぞれ活動報告ならびに収支決算報告が行なわれた。

また、渡邊監事より会計監査報告が行なわれ、両案ともに提案どおり承認された。

② 平成26年度活動計画ならびに収支予算案承認の件

小嶋幹事、岩瀬幹事より、それぞれ活動計画ならびに収支予算案の説明が行われ、両案ともに承認された。

③ 平成26, 27年度役員選任の件

三村幹事より、平成26, 27年度役員候補の紹介を含め説明が行われ、承認された。

④ 平成26, 27, 28年度顧問選任の件

三村幹事より、平成26, 27, 28年度顧問として宅間顧問を専任する説明が行われ、承認された。

2. 定例研究会活動状況報告

総会終了後、平成25年度の活動状況について、各グループリーダーから報告があった。

(1) 第1グループ(武田リーダー)

① 研究テーマ

品質システムの研究「原子力QMSのあるべき姿に関する研究—セクタ規格の調査・検討—」

② 活動概要

H25年7月31日を初回に、H26年4月22日の6回に渡り第1グループ定例研究会 兼幹事会を開催した。原子力QMS のあるべき姿を追求するため、最新QMSセクタ規格要求事項の改正状況調査、及び原子力QMSとして取入れるべき要求事項の検討。

・セクタ規格の調査として、ISO/CDとISO9001:2008との比較で改正点の確認、



JEAC4111/JEAG4121附属書-1改正の確認、IAEA GSR Part2 DS456改訂案の特有事項の確認、NSQ-100/JEAG4121/NQA-1の比較からISO 9001:2008からの追加事項を確認し、各セクタ規格の特異な要求事項について抽出を行った。

・原子力QMSのあるべき姿に関する議論として、先に抽出された特異な要求事項に対し、原子力業界として実効的な要求事項となり、取り入れるべきかの観点から議論を行い、リスクに基づく考え方、組織及び顧客の価値を達成、安全文化醸成活動の仕組み、利害関係者とのコミュニケーション、リーダーシップ、規制機関からの伝達事項プロセス、納品後のサポート等の要求事項を、取り入れるべき内容として今後審議することとして抽出した。

(2) 第2グループ(氏田リーダー)

① 研究テーマ

エラーマネジメントに関する調査研究

② 活動概要

(i) 福島第一事故の総括

福島第一事故の分析と評価のために、「事故時TV会議分析(中西教授)」、「事故時緊急対応分析(吉澤氏)」の講演及び「福島第一/第二事故時対応比較分析」に基づき、想定外事象で人間や組織の対応をどこまで期待できるのかをテーマに、安全を達成するために必要な個人及び組織の在り方を調査・検討を実施した。

・「原子力自主安全性向上WG(原子力政策課)」論点に対する考察、「PRAの実施方策の日米比較」及び「安全思想の再構築」の調査・検討を実施した。今後、これらの論点整理も含め更なる検討を進めることとした。

(ii) Resilience Analysis Grid(RAG)の検討と良好事例の分析

日常的に柔軟な対応力(レジリエンス)を付加・融合したマネジメントシステムを調査・検討を継続して実施した。

・Hollnagel博士が提案する、レジリエンス分析評価グリッド(Resilience Analysis Grid: RAG)の内容把握とガイド作成により、現状の組織の分析評価を試行した。RAGは、レジリエンスを構成する4つの主要な能力(対応能力、監視能力、学習能力、予測能力)の相互関係に焦点を当て、今ある脅威、さらには機能を低下させる脅威に対しての組織のレジリエンス能力を評価するアプローチフローについて確認した。今後、実組織における分析評価を継続することとした。

・アポロ13号、ハドソン川不時着、ハヤブサ帰還の良好事例について、考察と教訓と今後の課題の分析を実施した。今後、本3事例を含め、過去分析の組織事故9事例も含め、教訓シートに纏める作業を行うこととした。

(記録; 奈良)



Ⅱ. 第24回通常総会・特別講演

「福島原発事故の分析視点-多様な失敗の要素を考える」

講師: ノンフィクション作家

柳田 邦男 氏

第24回通常総会特別講演では、ノンフィクション作家として著名な柳田邦男氏をお迎えして、福島第一原子力発電所事故におけるリスク分析の視点、多様な失敗の要素についてご講演いただきました。数多くの事故事例を紹介しながらお話いただき、参加者(93名)興味深く拝聴しました。

講演の概要は次号以降で紹介いたします。

Ⅲ. 平成26年度定例研究会・各グループ活動計画

1. 第1グループ活動計画(武田博文リーダー)

(1) 研究テーマ

品質システムの研究

「原子力QMSのあるべき姿に関する研究 ―セクタ規格の調査・検討―」

(2) 研究の内容

原子力QMSのあるべき姿を追求するため、H24年度研究成果とH25年度抽出した事項のセクタ規格の調査・検討の審議を行い、原子力QMSのあるべき姿について提言する。

・ISO 9001-2015改定、NSQ-100 ISO化などの最新動向をモニタリングし、要求事項に対する対応についての先行議論を実施し、セクタ規格へのフィードバックを実施する。

・これら調査・検討の結果をもとに、原子力業界として実効的な要求事項となり、取り入れるべきかの観点から議論を行い、原子力セクタ規格への提言としてまとめる。

2. 第2グループ活動計画(氏田博士リーダー)

(1) 研究テーマ

エラーマネジメントに関する調査研究

(2) 研究の内容

1) 福島第一事故の分析と評価

H25年度活動に引き続き、「安全を達成するために必要な個人及び組織の在り方」を、以下の調査・検討を通して引き続き調査・研究する。

① 福島第一事故時の緊急時対応分析

レジリエンスエンジニアリング(RE)及び高信頼性組織(HRO)の手法を用いて昨年度緊急時対応を分析した。今年度は分析結果を整理し提言をまとめる。

②全思想の再構築

(「原子力自主的安全性向上の論点・整理と役割分担と工程の提言」「確率的安全評価(PRA)日米比較分析」「安全思想の再構築工程検討」)の調査・検討を昨年度実施した。今年度は、全員で議論して、提言としてまとめる。

2)レジリエンス・エンジニアリングの適用

- ① Resilience Analysis Grid(RAG)のシート見直しと現在組織の再分析及び詳細化の調査・検討する。各社へのQA活動への反映まで実現したい。
- ②良好事例分析として、統一的な教訓シートに基づき、昨年度分析した良好事例(3事例)・過去に分析した組織事故分析(9事例)を見直し教訓を抽出する。

IV. 26年度役員紹介

1. 役員紹介

会 長	関村 直人 (東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻 教授)	
副会長	田中 朗雄 (株式会社 東芝)	
副会長	石橋 邦夫 (株式会社 日立製作所)	
副会長	松本 純平 (三菱重工業 株式会社)	
幹 事	岩瀬 啓二 (株式会社 東芝)	
幹 事	奈良 順一 (一般社団法人 原子力安全推進協会)	
幹 事	武田 博文 (株式会社 東芝)	
幹 事	西田 徹 (GEインターナショナルインク)	
幹 事	浅田 義浩 (三菱重工業 株式会社)	新任
幹 事	三村 靖 (日立GEニュークリア・エナジー株式会社)	
幹 事	恒光 正雄 (三菱重工業 株式会社)	新任
幹 事	風間 英明 (日立GEニュークリア・エナジー株式会社)	新任
監 事	渡邊 邦道 (一般社団法人 原子力安全推進協会)	
監 事	岡澤 需 (元(社)日本原子力産業協会)	

2. 新任役員の紹介

浅田義浩氏、恒光正雄氏、風間英明氏が新役員として選任されました。

また、幹事として長年ご活躍された小嶋真作氏(日立 GENE(株))、三角竜二氏(三菱重工業(株))、及び今村敬氏(MHI 原子力エンジニアリング(株))が退任されました。

これまでのご尽力に感謝致します。



浅田 新幹事



恒光 新幹事



風間 新幹事

(記録; 奈良)

編集後記

本年1月に一般社団法人原子力安全推進協会主催の安全キャラバンで熊本大学の吉田道雄先生に「コミュニケーションと対人関係スキルー言いたいことが言える職場風土づくりー」と題し、コミュニケーションを中心に大変判り易く、「目からうろこ」のお話をたくさん頂いた。

ここで、その中の一つを紹介したい。

・先生が講演会を予定していた地に大型の台風が来るという予報が出た。先生はリスクを考え講演会をキャンセルした。しかし、台風は大したことはなかった。この時、結果論(『講演会をやれば良かった』)ではなく判断プロセス(『講演会をキャンセルした判断』)は正しかったと評価された。

結果論ではなくプロセスを重視することは、今後起こるであろう、多種多様な状況へ柔軟に対応できる能力を養う上で重要なことである。歴史に学ぶにしても、先人の行動や結果だけではなく、むしろその行動に至るプロセス、考え方から多くを学ぶべきなのだろう。

話は変わるが今年は、我が家の下の娘が大学受験を迎えている。一生懸命の姿を見ていると、なんだか可哀そうにさえなってくる。親としては手をこまねいて見ているしかなく、とっくの昔に喉元過ぎた“自分の受験”の時の方が気が楽だったように思う。

結果はこれからだが、受験勉強で頑張ったプロセスが感心に値するものなら褒めてやろう。

結果が伴えば言うことはない。

プロセスがだめでも運よく合格した場合はどうしよう。

多分、喜んで褒めてしまうのだろうが、「世の中そんなに甘くない、しっかりしないと就職の際に苦労するぞ」と釘だけは刺しておきたい。

仕事の上でも私生活面でも結果だけで物事を評価したり、一喜一憂したりするのではなく、プロセスを大切に思考を忘れず持ち続け、実践していきたいものだ。

(YM)

以上